



～ 高橋 伯夫 新院長より ～

**皆さん！お世話になります。  
よろしくお願い致します。**

私事、3年前から、毎週木曜日に循環器内科で診療して参りましたが、本日からは常勤として琵琶湖中央病院での診療に全力を注ぐ所存でございます。

まず始めに、自己紹介をさせていただきます。私は、昭和47年(1972年)に京都府立医科大学を卒業し、直ちに附属病院第二内科の研修医となって医療の最前線に立ちました。2年間の研修の後に、近江八幡市民病院の内科医員となり、1年後には京都府立医科大学の第二内科に戻って研究を始めました。研究テーマは「高血圧」です。当時の医学は、まだあまり発展していませんでしたので、高血圧は、それほど注目された研究テーマでなく、大学の中で研究班はなく、私と数名のメンバーで初めて研究を開始しました。昭和53年(1978年)から2年間、米国のカンサス大学の心臓血管薬理学講座に留学して、循環器領域の基礎研究(高血圧)を修めて帰国し、第二内科の循環器内科医として研究と診療ならびに医学生への教育の道に入りました。名勝「天橋立」を間近に望む場所に建ちます府立与謝の海病院に府立医科大学と兼任で計3年間赴任し、循環器内科診療と研究に明け暮れました。

平成元年(1988年)には、研究グループのリーダーが転属(教授昇進)になった京都府立医科大学の臨床検査医学講座に、私も移籍して講師となり、翌年には助教授(准教授)となりました。平成5年(1993年)、私が45歳の時に、縁があつて関西医科大学の教授として大阪の地に赴任致しました。学生教育、研究指導など教授としての本来の業務とともに附属病院では循環器内科、特に高血圧の診療を主体に行つて参りました。その他には、医療情報部長、後には大学情報センター長としてコンピューターシステム(10年前からは電子カルテの運用)の推進役として働いてきました。また、病院の運営にも関与して、病院長補佐、副病院長、病院長なども歴任して参りました。

以上のように、43年間に亘る長い臨床経験をもとに、それらの知識と技術を地域の皆様に還元したいものと考えまして、この度、琵琶湖中央病院長をお引き受けする



ことに致しました。当院は、リハビリテーション(以下、リハビリ)に力を注いでいることは周知です。私は、関西医科大学附属病院長の時に聞いたリハビリ専門医の話に衝撃を覚えるほどの印象を持ってリハビリの威力を知りました。それ以来、リハビリ科の部長からリハビリの現状や課題について話しを聞く機会を増やして私なりにリハビリの知識を蓄えてきたつもりでいますが、まだまだ未熟ですので、今後、さらに研鑽を積む覚悟でございます。当院で仕事をしたいと望んだ理由の一つがこのことでございます。もう一つの理由は、当院を受診される患者さんが悩んでおられる病気の主体をなすものが循環器疾患だということで、私の力量を試す絶好の環境だと考えた次第です。当院通院中の患者さんのほとんどが高血圧、糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病をお持ちです。その結果、皆さんは脳血管障害や心臓機能障害をお持ちで、そのためのリハビリをされているのですから、側面からしっかりと医療でお支えしたいと思うのです。

「2025年問題」というのが各方面で取り上げられています。これは、大団体の団塊世代の人々が後期高齢者(75歳)の仲間入りをする年を意味します。つまり、高齢者人口がピークを迎えるのです。70歳を超えると医療費が急激に増加し、生涯医療費の約半分が費やされるとされます。65歳以上から高齢者ですが、今年2015年に団塊世代は高齢者となります。言うまでもありませんが、予防すなわち生活習慣の修正が最も大事なことで、「ここまできたらどうしようもない」と諦めておられる高齢の方が大半だろうと推測します。しかし、医療は大きく進歩しています。アンチエイジングという言葉があります。意味は、「歳をとることに逆らう」ということで、「若返る」というものではありませんが、効果は確実にあります。生活習慣病の行く末で問題になるのは動脈硬化ですが、その際には血管壁にプラークという島状の脂肪の塊が生じ、これが亀裂を生じることで脳卒中や心筋梗塞を引き起こすのですから、それを抑制すれば全身の血流をしっかりと保つことができ若さと活力を維持できるのでから歳に逆らうアンチエイジングとなるはずで、その方法(治療法)があるのです。すでに、多くの方がその恩恵を受けておられるものと思いますが、そのことを第一線で実践してきたプロフェッショナルが私ですので、診察させていただいて皆さんの治療状況を臨床検査などで再評価して、適正な治療にお導きしたいと思います。

皆さん、どうぞよろしくお願い致します。

平成27年4月1日

